



伊藤通明追悼号



2016・2・3

SORA 65号

・伊藤通明百句・より

柴田佐知子抄出

畦越えてくるよ無数の曼珠沙華

桃太る袋のなかの明るさよ

七夕の青竹屋根を抽きてしなふ

けだものの舌みな赤き涅槃像

立春の竹の節より水の音

杉山に杉の雨降る夏休み

ひろびろと母坐す盆の青畳

八十八夜きのふに髭の濃き思ひ

うつむける祭の馬を見たるのみ

どくだみの辺りの暗さいつも同じ

夕月や脈うつ桃をてのひらに

桃喰うてしばらく遊ぶ思ひかな

独り出て道眺めある盆の父

万緑や内側曇る哺乳罐 句集『白桃』

油虫生き場見られて逃げ場なし

幼くて董にかがむことを知らず

新生姜洗ひし水の走りだす

桜桃を洗ふ睫毛になりきつて

あかあかと誰が死人でも百日紅

睡りをり汗の腕に顔埋めて

夾竹桃目を動かさず人を見る

牛の眼の藁色なせる九月かな

馬の貌垂直にあり厄落し

くろぐろと前へゆくのみ寒行者

家に母ひとりを置けり祭笛

声低くずぶ濡れの鶉をなほ使ふ

禁制の火の美しき紅葉狩

餅配夕べ明るき山を見て

桐の花盥に曲る山の鯉 句集『西国』

父の杖母の下駄夏終りけり

旧盆の道の白さも生家まで

石臼に石のさざなみ鳥曇り

簾巻く日本海の半ばまで

死ぬことも忘れてゐたる日向ぼこ

神々の恋あからさま里神楽

誰に声かけても息の白く出て

涼しさや土間に木臼の跡のこり

なに色と問へば桜とこたへけり

井戸の底ひびきてゐたり栄西忌

父の死後父の名書かず花神

青芒ゆつくり動く雨後の山

蛤やいまにみづみづしき西は

あひみての後のさくらの色なりし

母の手を曳きし遍路を追ひ越さず

戒名の一字がこぼれ出て螢 志賀島

満月の海の中道海の上

笹鳴やくまなく濡れし白と杵

降り出して音となるまで朧の夜

雪景色

柴田 佐知子

伊藤通明先生逝去十一句

張りし目を頼みて鷹の渡りけり

月代の道をなきがらへと急ぐ

月光の道の至れる師の柩

菊の香や死者は上から覗かるる

満月に一と夜柩む預けおく

秋深し何もなき卓また拭きて

水鳥の闇の大きくなつて来し

玄海の匂ひの混じる隙間風

空白の日記の沖に雪煙

強く在ることに疲れしシヨールかな

橋一つかかつてゐたる雪景色

朝桜働くための木綿着る

花あんず卵とる手をつつかれし

たんぽぽや遠くへ行かぬ放ち鶏

金鳳花すこし歩けばまた古墳

拙僧はと話し出さるる花の中

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

母の胸思ひ出したる柚子湯かな

匂ひなき齡となりぬ近松忌

文机の落ち着く窓や冬の虫

団欒に喃語も混り福寿草

納戸なき部屋に住みぬて十二月

お使ひの子の自転車はお年玉

客もまた声を大きく年の市

迎春や十二の神の力瘤

待つ人の居ぬふるさととなりて冬

切り山椒亡母とわたしの帯のいろ

一山をまるごと写す初鏡

境内の落葉日和や古着市

涙目となりて焚火を離れけり

鳩居堂出て香移りの冬帽子

山風に細りてきたる注連飾

風花や楽屋入りする猿之助

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部早苗

喪の弥撒の奏者や赤い羽根はづし

鍋の耳つかみて卓へ一葉忌

戯れに遺書を一行冬桜

黒牛の草食むほかは冬の霧

木の家の木々も息して冬銀河

うなむすびほぼばりをれば時雨くる

結ふほどの髪となりけり寒牡丹

木の実独楽名簿はいつも隣り合ひ

冬珊瑚母性といふは果てしなく

木片に仏性宿る湖北冬

人の死に大根を炊く賑はひよ

煮凝や下京に日の暮れ果てて

弥撒了へし信徒生き生き黄水仙

モビールの揺るる来し方炬燵猫

寒晴れや流木に錆ぶる五寸釘

読初や翁去来の座の中へ

福岡 柴田志津子

焼打ちのごとき騒ぎや歳の市

お狩り場の水音小さし冬の鳥

祠には過ぐる鳥居や冬ぬくし

冬牡丹祢宜の木杳の過ぎしのみ

杖の背をのぼしで似ぐ聖樹の灯

着ぶくれて呼び鈴にまた呼び出さる

寒晴やふれたるのみの力石

耳遠く山を見てゐる初座敷

福岡 岸 洋子

気に入りの鍋を磨きて年尽くる

船笛の北より響く除夜詣

十二年振り狙仙の猿よお元日

初晴や白鳥の頸すつと伸び

母の齢に話落ちつく鱒雑煮

読初は岩波古事記ワイド版

エスカレーター春着の一団連なれり

父母の墓訪ふ沿線の初景色

北九州 深川 淑枝

兵庫 戸栗 末廣

一帆の沖へ出てゆく冬田打

雨音の明るくなりし返り花

子別れの鴉に高き波頭

冬の日をあつめてメタセコイヤかな

木の実手に来し防人の岬かな

茶の花の籬に干せる素焼壺

海へ飛ぶ鳥の真白き風邪心地

梅の枝の伸び放題に年忘れ

貝殻のうたた砂へと冬深し

海鳥の羽ばたきに冬立ちにけり

風垣をくぐる流砂や沖晴るる

どの船も水尾残しゆく古暦

花石路や濤音を踏み百度石

いくたりも見送つて来し冬帽子

クリスマス船上カフェへ橋渡る

松の梢ほむらに色の出でにけり

粕屋 吉 田 葎

なまはげの面を付ければ鬼の声

長老の来て整ひし注縄作

山の陽を全部集めし懸大根

まづ父の訓示聞きたる雑煮かな

硝子戸のすつかり曇る猪粹理



岡垣 田中とし江

真鯛や海の雫のごと干さる

そのかみは鯨の浦ぞ冬日和

山茶花の月夜や父母の家閉ぢて

雁渡し竹杖ほうと鳴らしゆく

藻刈人流れに立ちしまま休む

宮崎 田代民子

夜焚火に爛して供すかつぽ酒

焼酎二本夜神楽の初穂料

夜神楽を待つ間の膝の冷えて来し

神楽宿神の淫らは許しておく

かつぽ酒酌み梟を聞きもらす

福岡 矢野百合子

柱座の残る礎石や冬すみれ

振り向けば灘一色に時雨けり

別れ来てひたすら歩く枯るる中

息白く言葉短くすれ違ふ

山褰を出づる煙に年惜しむ

福岡 田代貞枝

ありがたき僧の言葉や冬の梅
経読みてこころ鎮もる雪の夜
冬の灯を川に零して夜汽車過ぐ
川魚の石に眠りて月冴ゆる
さとすと猫にも言ふ冬日向

太宰府 山本則男

おほかたは沖を見てゐる焚火かな
枯れきつて風になりたる芒かな
貌とても省略したる海鼠かな
親鸞忌水を一杯いただきぬ
冬すみれ水城は山に尽きにけり

糸田 宮井知英

ト口箱の河豚瞬きをしてをりぬ
対岸の町の灯昏し一葉忌
冬ざるる鷺の羽裏は桃色に
石打てば罅割れさうな寒の月
星に星重なつてゐる寒夜かな

福岡 樋口みのぶ

短日や独りで使ふ夫婦箸
一羽でも来ればパン撒く雪催
笑ふとき笑くぼの欲しき春着かな
不条理な世に豆をうつ更に打つ
先生の似顔絵描きて卒業す

大阪 田岡千章

とろ火もて煎ずる薬秋深し

立冬の鏡の中の猫背かな

小六月ぼつくり寺に靴数多

健やかに老ゆるも大志花八つ手

負けぬ気はまだ衰へず蓮の骨

熊本 松田明子

またひとり身内の欠けて暮の秋

神木を滑りおりたる穴惑

火吹竹火種を育て転がされ

誂へし蒲団と共に嫁ぎけり

石垣の内の暮らしや寒椿

糸島 小林朱夏

初松籟終着駅は始発駅

突ついては首を傾げる寒雀

春の雪母の使ひし茶筌出す

口開けて園児の仰ぐ甘茶仏

踏切に落ちてゐたりしつくしんぼ

福岡 永淵恵子

栗の花死者は生者とともに生き

新藁の匂ひをつけて下校の子

弁財天の乳房ふつくら冬木の芽

江の電の揺れに小春の身をまかす

大仏の明かき胎内冬ぬくし

粕屋 秋 千 晴

秋の蝶翅震はせて止まりゐる
切株の木目に添ひて霜光る
お手玉の小豆の音の冬座敷
走り根に落葉のたまる城址かな
猫の子の匏屑にも飛びついて

福岡 あさなが 捷

まばたきて夫を忘れし雪をんな
塚を鎖す錠前錆びて冬菫
金色の光より出て宝船
傘立てにまだ母の杖春浅し
履物屋頭上注意とつばめの子

福岡 栗原 京子

湯ざめしていたづら好きの子の糸くぼ
冬の蜂受賞の花に群がれり
猪出でし場所教へ合ふ散歩かな
納屋の奥に猫の住みつくクリスマス
少年に冬の祭の水痛し

兵庫 岩井 京子

日のおたる順に色増すレモンかな
レモン配る庭に成りしがうれしくて
戻りたる歩巾うれしき霜の道
またしても鯨まぎれ込む鯉の群れ
飴なめて咳抑へをり手術前